

【連載：Who's Who ～オーディオのレジェンド～ 第5回】

「テープ録音機物語」を遺した阿部 美春さん

藤本 正熙

■ はじめに

阿部 美春さんは、我が国のテープ録音機の権威と呼ばしていただくのにふさわしい何名かの中のお一人である。

生涯をかけて円盤録音機からテープ録音機の開発、製造、標準化、執筆に取り組まれたオーソリティで、海外でも“Father of personal multi-track recording in the audio engineering field”として知られている。

2013年1月2日に逝去（享年81歳）され3年になるが、執筆の最後のお仕事としてJASジャーナルに連載された「テープ録音機物語」が、生前のご本人ならびにご家族の想いが実り、このたび単行本として出版される運びとなった機会に阿部さんの業績の一端を振り返りたい。



■ 「テープ録音機物語」の執筆

2001年10月、オーディオ協会創立50周年記念事業としてJASジャーナル特別号「オーディオの世紀」が刊行されたが、より詳細に日本のオーディオの足跡を記録に残すため、電音、TEACで谷勝馬さんと共に録音機器を手掛けられた阿部 美春さんをお願いして、2003年7月号より2004年5・6月号まで8回連載で「国産円盤録音機物語」（全58ページ）を執筆いただいた。

「テープ録音機物語」は、この姉妹編として、2004年7月号の「その1」から2012年11月号の「その66」まで、毎回読切り形式で合計約500頁を越える阿部さん渾身の力作である。

病床での阿部さんは「その66」に続いて「その67」NR-dbx、「その68」エルカセットとユニセツト、「その69」プロ用テープ録音機・アナログ、「その70」プロ用テープ録音機・デジタル、「その71」セミプロ用マルチトラック録音機、「その72」補足まで構想を練られており、阿部さんがミュージシャンにとって手軽に作品を制作できる録音機材、パーソナルMTR（通称パソレコ）やPortastudioなど、パーソナルレコーディング機器やガレージスタジオの道を開拓されたあたりを是非とも書き残して頂きたかった。

■ 円盤録音機の執筆をお願いしたのは

1931年3月31日生れの阿部さんは東京理科大学に学び、1951年に電音に入った。電音すなわち株式会社日本電音機製作所（略称デンオン、現デノン）は、1939年5月に坪田 耕一さんが谷勝馬さんらを擁して設立した会社で、日本初の円盤式録音再生機TPR-14-Cなどを開発し1947年に日本コロムビア系列となっていた。

私の上司であった日本ビクターの井上 敏也さん（元日本ビクター専務）がAESジャーナルのレコード100年記念号（Vol.25, No.10/11, 1977）に“The Recording Industry in Japan”を寄稿

されたが、その中でNHKと電音がLPレコードの円盤式録音機、すなわちカッティングマシンを開発し、このマシンを用いて1953年に日本ビクターがカッティングからプレスまで初めて国産化したLPレコードを発売できたことを紹介している。

その当時、日本ビクターとRCAビクターの間では原盤契約があったものの、マスターテープの供給のみでLPレコードのカッティングからプレスまで製盤は自力で行なわざるを得なかった。

このことが脳裏にあって、日本の録音機器の先達である坪田 耕一さんや谷 勝馬さんと当時から一緒に仕事をされた阿部さんに、JAS ジャーナルに連載で「国産円盤録音機物語」の執筆をお願いした。

■ LP カッティングレース

阿部さんは、「国産円盤録音機物語（その7）LP録音機」（JAS ジャーナル 2004年4月号）の中で、国産初のLPレコードの制作秘話を次のように書かれている。

『1948年、米国コロムビアによるLPレコードの発表から3年後の1951年4月、ようやく日本コロムビアが原盤とレコード材料を輸入して国産初のLPレコードを発売した。一方、日本ビクターはLPレコードの全工程を国産化する道を選んでいた。

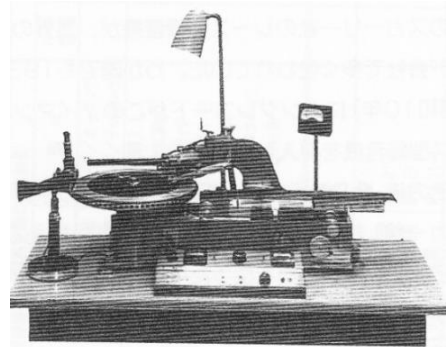
たまたま、1953年5月、NHK技研の公開日に展示されたLP録音機を日本ビクターの井上 敏也氏が見て、早速製作者であるデンオンに発注すべく相談に来られたが、録音機としてはまだ試作品でもあり、納期もだいぶ後になる。それならばNHK技研向けの録音機を借りてLPのカッティングを行なえないものかと、その交渉がNHK技研とデンオンに向けられた。公開日の後、仮縫いのLP録音機は再度デンオンの工場に戻ることになる。数ヶ月後のNHK納入前、合間を縫ってLPのカッティングがデンオンの工場で行なわれることになった。

まず、仮とはいえ、録音機の据付け土台をコンクリートで固めるところから始まった。当時、デンオンの工場は北多摩郡三鷹町下連雀、まだ田舎ではあったが、近くを走る都道の交通量は無視できず、騒音と振動を避けるため、夜中の決行と相なった。真夏の暑い夜で当時エアコンなんて代物はなかった時代で、蚊取り線香を焚きながらの作業であった。

日本ビクターからは井上 敏也他の3氏、デンオンサイドは坪田 耕一 常務取締役、谷 勝馬 研究試作課長の2氏と助手の阿部（筆者、当時設計課員）、計6名が関係することになった。作業が夜中になるので、デンオン側の実務担当には若い筆者が駆出されたようなものである。

この国内カッティングによるLPレコード第1号はハイフェッツのヴァイオリン演奏による「スペイン交響曲」とコルトーのピアノ演奏による「別れのワルツ」である。ハイフェッツは米国録音だが、コルトーは日本で録音した記念すべきアルバムであった。』

日本ビクターのLPレコード初回発売は1953年10月新譜で、12吋盤のコルトー：ショパン名曲集（LS-2001）と10吋盤のラロ：スペイン交響曲／ハイフェッツ他であったが、コルトーのショパン名曲集は、コルトーが来日した1952年12月に築地のビクタースタジオにおいてマグネコーダーで録音されたもので、この録音現場にたまたま谷 勝馬さんも立ち会われており、



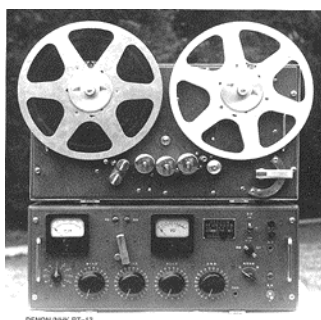
電音カッティングレース R-28-0
（国産円盤録音機物語より）

『コルトーがスタジオに入るなりぶっつけ本番で演奏された冷徹なプロ意識に谷さんが感心された』と JAS ジャーナル 1994 年 12 月号の随想の中に記されている。この演奏が電音のカッティングマシンで初の全工程国産化 LP となったのもご縁が深かったと言えよう。

■ 阿部さんとテープ録音機

1949 年に NHK が米国マグネコード社 PT-6 型テープ録音機を放送用に導入し、東京通信工業（現ソニー）も我が国初の市販用テープレコーダ G 形を発売し、テープ録音時代を迎えた。

PT-6 型をモデルとして NHK とともに業務用録音機の国産化に着手したのが東京通信工業と日本電気音響（DENON、以下、電音）である。電音は 1951 年にポータブル型 R-26-F（NHK 型番 PT-12）を NHK に納入した。



携帯形 R-26-F *



コンソール形テープレコーダ R-28-P2 *

1949 年にはアンペックス社が据置き形の 300 を発売し、これをモデルに NHK が国産化を図り、電音が 1952 年に製作したのが R-28-P（NHK 型番 ST-13）で、1953 年には改良型 R-28-P2（NHK 型番 ST-14B）を製作している。（*写真は「テープ録音機物語」より転載）

阿部さんも 1951 年に電音のこの現場に加わり、主として電気回路系の設計を担当され、サービス、品質管理、標準化渉外など幅広い経験をされた。

阿部さんが「テープ録音機物語」の中で記された一部から要約すると次のようなキャリアを積み重ねている。

『谷 勝馬さんは 1953 年、東京テレビ音響株式会社（後のティアックオーディオ）を設立したが 2 年後にヤマハに買収され、谷さんはヤマハの東京研究所長となり私も参加した。

1956 年ごろ谷さんの弟の鞆馬さんが 3 モーター・3 ヘッド式を実現したステレオテープデッキを試作し、谷さんはこれを商品化するために東京電気音響株式会社（ティアック・TEAC）を 1956 年 12 月 24 日に設立したが、電音、ヤマハで設計をともにしていた私も呼ばれて 1957 年 4 月にティアックに移った。

またこの時期に民生用として鞆馬さんが試作した TD-102 が発売された。定価は 59,000 円で半年たっても一向に売れる様子がなかったが、駐留中のアメリカ人の目にとまり、さしもの在庫は一扫され当初の予想（50 台）をはるかに超えて生産に追われるようになった。

ティアックにまだサービス課がなかったときで、修理はもっぱら私が兼務し、米軍基地には

先方の都合もあって、夕方から出かけることが多くなった。帰りには将校クラブでご馳走になることが多かった。殆どの症状が操作ミスによるもので、英語と筆談を交えて理解してもらうのに結構時間を費やした。

ティアックの評判はアメリカ本土まで伝わり、ついには超高級テープレコーダーメーカー、Concertone 社の社長が来訪し、月産 200 台の契約を交わしていった。このようにして TEAC はアメリカの足がかりを得て、日本よりはむしろアメリカで評判の高い、オーディオマニアにとって伝説的な会社に成長していく。』

以降、阿部さんはステレオテープデッキ、ステレオカセットデッキ等を開発しテープステレオ時代の基礎を築く。1971 年からは音楽家用 MTR (マルチトラックレコーダー、TASCAM ブランド) とミキサーの開発に着手、パーソナル MTR の基礎を作った。

ティアックにおいての阿部さんは取締役オーディオ技術部長、同特機 (TASCAM) 常務取締役等を歴任された。

■ 標準化活動

阿部さんは 1958 年頃の早い時期から磁気録音関連の標準化作業に参加されている。

1968 年から 1973 年までは日本電子機械工業会 (現電子情報技術産業協会 (JEITA)) のテープレコーダ技術委員長を務め、国際標準を制定する IEC SC-60A の会議に 1968 年以降、日本代表メンバーの一員として参加、JIS の制定にも貢献した。

第 1 回 SC-60A の会議は 1968 年 11 月 4 日から 1 週間ノルウエーのオスロ市で開催された。日本からの代表は阿部さん一人で、『会議場の事務局に行き登録をすまし、テーブル上の関係書類をピックアップしたところ、20cm ほどの厚みになってしまった。初めて見る文書ばかりで、日本には通産省工技院まで船便郵送であったため日本を発つ前には受け取ることができなかった。夕食は簡単にすまして早々に部屋にもどり、全文書を読み終わったのが夜中の 2 時になってしまった。』と「テープ録音機物語」の中で当時のご苦労話を披歴されている。

これらの業績に対して、1989 年通産大臣賞、1994 年藍綬褒章、1998 年日本電子機械工業会功労賞を受賞された。

■ パソレコ機器

1970 年代の初め、米国で 4 チャンネルステレオ用のテープデッキが、ミュージシャン達によって自分の作品を売り込む目的での、マルチトラック録音用に利用されはじめた。

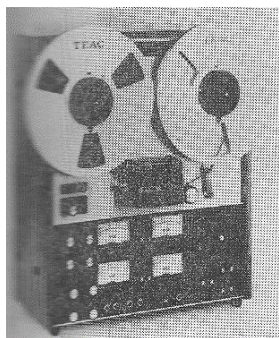
ティアックは 4 チャンネルテープデッキにシンク機能をつけた A-3340 を 1971 年に開発し、これを皮切りに品質や信頼性はプロ並みで、ミュージシャンが容易に使える価格の録音機材を目標にした TASC (TEAC Audio System Corp.) という開発グループが開設され、TASC 製品のマーケティングと販売を行う TASCAM (TASC America Corp.) が 1971 年にアメリカで設立され、次々にパーソナル MTR 関連の新商品を送り出した。

1978 年には、コンパクトカセットを用い、シンク録音のできる 4 チャンネルデッキと 4 入力のミキサーを一体にした普及型のマルチトラックレコーダー 144 形 Portastudio を発売し、パソレコあるいはガレージスタジオの普及に拍車をかけた。(** 写真は日本オーディオ協会編：オーディオ

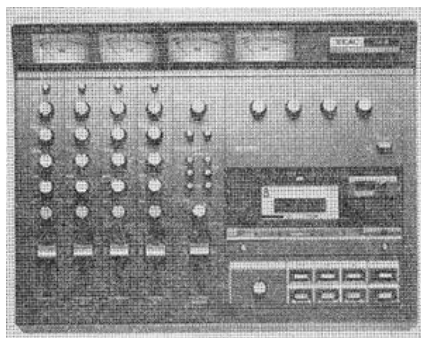
50年史より転載)

単身赴任で米国 TASCAM の技術担当副社長を務められていた阿部さんを、業界では敬意を込めて「パーソナル MTR の父」と呼んだ。

阿部さんのこれまでの磁気録音に関する功績に対して、1979年5月、ロサンゼルスで開催された第63回 AES (Audio Engineering Society) コンベンションで AES フェローシップ Award が贈られた (***) 写真は JAS ジャーナル Vol.27, No.7/8 より)。私も同じくフェローシップの受賞で同席させていただき、以降親しくお付き合いをさせていただくきっかけとなった。



A-3340 **



144形 Portastudio **



AES で McKnight 会長から
賞を受ける阿部さん ***

阿部さんは1981年に FOSTEX に転じ、録音機器部門を新設、副社長として1991年までパソレコの普及に努めた。1981年には主にカセット用テストテープを製造・販売する ABEX (現 ALMEDIO) の設立にも参加されている。2000年からは専ら執筆活動をされ、「テープ録音機物語」が完結間近での遺稿となった。

■ むすび

音楽制作現場のレコーダは1970年代後半の回転ヘッド型 PCM、1980年代の固定ヘッド PCM 時代を経て、1990年代後半からハードディスクレコーダ、DAW の時代へと大きく変貌したが、阿部さん達が現場のニーズと技術進歩を先取りしたパーソナル MTR の開発は、その後に続く録音システムのブレークスルーへの橋渡し役を務めるものであったと言えよう。

EIAJ がテープレコーダの生産額統計をとり始めた1953年は約6億円の産業であったのが、1981年にピークを迎え約7100億円の産業となっており (EIAJ 編、電子工業50年史・資料篇・1998年)、阿部さんをはじめテープ録音機の時代を牽引された皆様のご努力に敬意を表したい。

阿部さんには、永年にわたる磁気録音技術の開発・標準化・著作による啓蒙、業務用パーソナルレコーディング機器開発と商品化における貢献に対して、2008年に日本オーディオ協会賞が贈られた。

「テープ録音機物語」は阿部さんが膨大な資料を丹念に整理し、鋼線録音機から磁気テープ録音機、オープンリールからカセットテープに至るまで、凡そ100年にわたる欧州、米国、日本における録音技術と製品の流れを集大成されたものである。JAS ジャーナルでの連載時には「その1」から「その14」まではジャーナルの印刷紙面に掲載されたが、「その15」以降はネット配信で会員の皆様に届けられた。これらが1冊になったこの機会に是非とも手元に置いて頂きたい。